



ミラノ・スカラ座の引っ越し公演。『オテロ』舞台装置の前でスタッフと



舞台制作のアルバイトとして最初にかかった『黒蜥蜴』

感動の蓄積が、次の仕事に向かう
エネルギーとなりました。

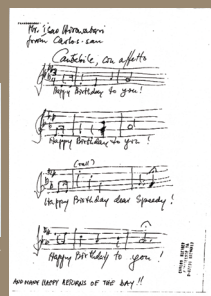
特別賞／プロデューサー、演出家
広渡 勲氏

「フランス芸術文化勲章シュヴァリエ」授賞式にて

誕生日にカルロス・クライバー氏から届いたFAX



カルロス・クライバー氏が亡くなるまで交流は続いた



(プロフィール) **広渡 勲** (ひろわたり・いさお) 1940年福岡市生まれ。早稲田大学第一文学部文学科演劇専修卒業後、東宝演劇部に所属。在籍中にハワイ大学に1年間留学し、その後欧米の劇場を視察して帰国。1970年「アメリカン・バレエ・シアター」来日公演を契機にジャパン・アート・スタッフに移籍。その後、制作プロデューサーとして、「ミラノ・スカラ座」「ウィーン国立歌劇場」「メトロポリタン歌劇場」「バイエルン州立歌劇場」「ベルリン・ドイツ・オペラ」「英国ロイヤル・オペラ」などの世界の主要歌劇場や、「パリ・オペラ座バレエ団」「英国ロイヤル・バレエ団」「モーリス・ベジャール・バレエ団」など世界的なバレエ団を数多く招聘、公演を成功に導く。指揮者のバーンスタイン、クライバー、振付家のベジャール、パントマイムのマルセル・マルソーなど海外の著名な芸術家との交流も深めた。2000年、フランス共和国政府から「フランス芸術文化勲章シュヴァリエ」叙勲。2003年から昭和音楽大学で教鞭をとり、現在は客員教授。

フレッシュアーティスト賞／チェリスト
佐藤 晴真氏

価値観や文化の背景も含めて、
クラシックの本質を学びたい。



留学した夏、マインツ先生と。2016年

中木健二先生の初めてのレッスン。
2009年ミュンヘン国際音楽コンクールの
本選直後。2019年

弦楽四重奏での演奏会。2021年

(プロフィール) **佐藤 晴真** (さとう・はるま) 1998年名古屋市生まれ。2019年、長い伝統と権威を誇るミュンヘン国際音楽コンクール チェロ部門において日本人として初めて優勝し、一躍国際的に注目を集める。ルトスワフスキ国際チェロ・コンクール第1位および特別賞、第83回日本音楽コンクールチェロ部門第1位および徳永賞・黒柳賞、第13回ドメニコ・ガブリエリ・チェロコンクール第1位、第1回アリオン桐朋音楽賞など多数の受賞歴を誇る。すでに国内外のオーケストラと共演を重ねており、室内楽公演などにも出演して好評を博している。これまでに、林良一、山崎伸子、中木健二の各氏に師事。現在は、ベルリン芸術大学にてイエンス＝ペーター・マインツ氏に師事している。2020年に第18回齋藤秀雄メモリアル基金賞、第30回出光音楽賞受賞。使用楽器は宗次コレクションより貸与されたE. ロッカ 1903年製。ベルリン在住。

― 受賞の知らせを受け取ったときの感想からお聞かせください。

佐藤 ちょうど名古屋の実家にいるときで、ほんとうにびっくりしました。間違いない電話じゃないかなと思ったくらいで、すぐに家族と先生方に連絡をしました。

広渡 僕は福岡で舞台稽古の真っ最中だったので、最初はよくわからなくて、「え？稽古が終わったら連絡します」と言っただけで、それであとで聞かされて驚いた(笑)。ドタバタだったので東京に戻ってから喜びを実感しました。

― 佐藤さんがチェロを始めたきっかけは？

佐藤 4歳のころ、兄のヴァイオリンの発表会に行き、そこでたまたま中木健二先生のチェロを聴いて興味を持ちました。ただ、それから兄もチェロをやりたいと言い出して、僕は兄のおさがりのヴァイオリンを弾き始めたのですが、やっぱり僕もチェロがやりたくて6歳のときに転向しました。

― もともと音楽一家のご出身ですか？

佐藤 いえ、そういうわけではありません。両親は京都の大学で学生オーケストラに所属していて音楽好きではありましたが、特に僕を音楽家にしようとは思っていませんでした。ただ、家ではクラシックなどがいつもかっいて音楽が身近ではありました。

― 本気で音楽に取り組もうと考えたのはいつごろでしょうか？

佐藤 チェロは幼いころから日課のように続けていたのですが、特に大きな転機があったわけではないのですが、今思うと、名古屋から東京の高校(東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校)に出てくるタイミングだったのかもしれない。ずっと楽しく音楽を続けていて、それは今もそうなのですが、加えて覚悟のようなものが生まれた気がします。

― 広渡さんは、舞台芸術との出会いはいつごろでしょうか？

広渡 僕は福岡・中洲の出身で、母は料亭を営み、小唄の師匠でもあったので、幼いころから芸事になじんでいました。加えて父はクラシックのマニアで大量のレコードを所蔵していて、家では音楽を湯水のように浴びていました。父に連れられて初めて聴いた生の演奏会がウィーン・フィルの初来日公演で、指揮者がヒンデミット。自分がこの仕事をするようになってそのことを知ったのですが、贅沢な経験だったと思います。

福岡では歌舞伎公演も多くて、しょっちゅう観に行っていましたし、帰ってきたらボール紙で舞台の模型づくりをするという、不思議な子どもでした。たね(笑)。

― 早稲田大学で演劇を専攻され、その後、東宝に入社されています。

広渡 歌舞伎の勉強がしたくて早稲田に入りました。2年生のとき、江戸川乱歩の原作を三島由紀夫が書き下ろした舞台『黒蜥蜴』で制作のアルバイトを始めました。装置や大道具、小道具の仕込みなどの裏方です。以来、大学時代はアルバイトに熱中して、授業に出るのが年に30日くらいで、あとはずっと劇場通い。自分の教え子たちには言えませんが(笑)。それで卒業というときに、たまたま知り合った東宝の方から声をかけられて、就職をさせていただきました。

東宝の演劇部では演出助手や舞台監督として商業演劇、ミュージカル、歌舞伎と幅広く経験して、ハワイ大学に留学して舞台美術の勉強もさせてもらいました。しかもその帰りにニューヨーク、ロンドン、パリなどの一流の舞台を観て回る世界一周旅行もさせてもらい、東宝にはとても感謝しています。

ただ、たまたまアメリカン・バレエ・シアターの来日公演を手伝ったことがきっかけで、本物のバレエの世界に圧倒され東宝を退社、その後はオペラとバレエの仕事専門的に手がけるようになりました。

ミュンヘン国際音楽コンクールは結果より演奏後の達成感(佐藤)
神様が与えてくれたオペラ公演の順番(広渡)

― 佐藤さんは2019年のミュンヘン国際音楽コンクール チェロ部門で日本人として初めて1位となりました。そのときのお気持ちを聞かせください。

佐藤 日本人初というのは、受賞を知らせてくれた新聞記者さんから聞かされて知りました。特にそれは意識していなかったですし、コンクールではとにかくいい演奏をしたいという気持ちのほうが強かったです。

個人的には順位よりも、納得した演奏ができていたので、そのことに達成感がありました。1位になってうれしいのは確かですが、結果発表の驚きよりも、演奏後の達成感のほうが大きかったように思います。

今、僕が師事しているイエンス＝ペーター・マインツ先生も25年前にミュンヘン国際音楽コンクールで1位になっているのですが、そのあとを追いかけることができたことがうれしいです。

― 現在はベルリンを拠点に活動をされていますが、ご自身の演奏に何か変化がありますか？

佐藤 まず一人暮らしを始めたことで考える時間が増えましたね。諸先生方があんなことを言っていたなとあらためて思い出したり、ふだんの生活から何でも自分で決めていかなければならないので、とにかく考える時間が多く



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第32回 日本製鉄音楽賞 受賞記念コンサート 7月13日に紀尾井ホールで開催

7月13日、紀尾井ホール(東京・千代田区)で第32回日本製鉄音楽賞の受賞記念コンサートが開催されました。

「日本製鉄音楽賞」は、日本の音楽文化の発展と、将来を期待される音楽家のさらなる活躍の支援を目的として日本製鉄が創設したものであり、1990年の創設以降、毎年、受賞者への贈呈式と受賞記念コンサートを開催しています。本年は、将来を期待される優れた演奏家に贈られる「フレッシュアーティスト賞」は、チェリストの佐藤晴真氏、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした個人に贈られる「特別賞」は、プロデューサー・演出家である広渡勲氏が受賞。贈呈式は3月31日に本社で行われ、橋本社長から記念の盾と賞金が贈られました。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第1部では、広渡氏による受賞記念トークが行われた。「これから舞台芸術を目指す若者の励みになれば」と、受賞理由を感慨深く話す広渡氏。舞台上で裸火を使用するなど数々のセンセーショナルな舞台の仕掛けがいかにして誕生したか、名だたる巨匠たちとともに究極の美学を追求してきた半生を、演出された舞台の動画や写真をもとに熱く語った。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第2部では、佐藤氏によるチェロの演奏が行われた。佐藤氏が全身で奏でるのびやかで重厚感のある音は曲が持つ物語や情景まで表現。全観客がその音色に酔いしれ、演奏終了後には万雷の拍手を送った。「僕にとって紀尾井ホールは特別な場所。この縁を噛みしめながら、今、幸せな時間を過ごしています」と語り、アンコール曲を披露した。

公演を終えたお二人に感想をいただきました。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

「ほぼ初めて仕切られる立場になりましたが、とても楽しかったですね。21世紀になって芸術を取り巻く環境は激変していますが、舞台芸術を廃れさせるわけにはいきません。偉大な芸術家たちが残した文化遺産を、次世代へつなぎ、託すのが私の使命だと思っています」(広渡勲氏)

「紀尾井ホールという場、同じ大学で学んでいるピアニスト・久末航さんとのデュオということで、始終前向きな気持ちで演奏し本番を終えられました。錚々たる先輩方が受賞されているこの賞をいただき、今日演奏できたことに、感謝の気持ちでいっぱいです」(佐藤晴真氏)

本演奏の様子は、オンライン配信を行っています。<https://www.nipponsteel.com/csr/social/music/prize.html>

なりました。

僕はマインツ先生に憧れてドイツでの生活を始めたのですが、先生の本当の意味での音楽性は、ヨーロッパにいないとわからなかったように思います。人々の歩くスピードだったり、天気の違い、移り変わりが多かったり、その土地で育まれた音楽は、そこで暮らして初めてわかるものだなと感じています。

——音楽の背景にある文化も含めて知る必要があるということでしょうか。

佐藤 そう思います。特にクラシックは長い歴史のほとんどがヨーロッパで発展してきました。その土地で活動する演奏家の音楽はやっぱり違う気がします。僕が日本で師事した先生たちもヨーロッパで勉強した方ばかりで、僕自身もそうした先生たちが体感したものを得たいと思うていました。だから向こうでの生活はすごく充実しています。

——広渡さんも世界中のアーティストとお仕事をされてきました。同じようにお感じですか？

広渡 イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、たくさんの国の芸術家と仕事してきましたけれど、国や土地によってやっぱりぜんぜん違います。同じドイツだって、バイエルンとベルリンじゃだいぶ違いますよ。バイエルンだと、ドイツ語をしゃべるイタリア人みたいで、ちょっとラテン(笑)。

佐藤 わかります。関東と関西みたいな(笑)。

広渡 そうそう。ただ、僕の場合は逆にその違いを楽しんでやってきたようなところもあります。僕のオペラの仕事は、最初が1974年のバイエルン州立歌劇場(ミュンヘン・オペラ)の引越公演です。まだ33歳でしたが技術監督を任されて、ミュンヘン側の大御所の技術監督と打ち合わせを重ねたのですが、こいつで大丈夫なのかと心配するような目が痛くて痛くて(笑)。のちに生涯の友となる世界的指揮者のカルロス・クライバーとの初めての出会い

もこのときです。

ミュンヘンのあとは、1979年の英国ロイヤル・オペラ、80年のウィーン国立歌劇場、81年のミラノ・スカラ座の順で来日公演を手がけました。今思えば、この順番は神様が奇跡的に与えてくれたのかなと思います。まずドイツらしい徹底して準備する舞台を経験して、次にイギリスの日本と同じサイズ感の舞台を経験して、それで最後にスカラ座。これが大変でした。彼らとは打ち合わせしても現場で山ほど問題が出てくるし、舞台稽古もめちゃくちゃ。初日が開くか心配で、準備中はどうも二度とやりたくないと思っていました。でも、本番がすごいんです。極限の集中力で舞台をこなし、幕が降りたときのあの感動は忘れられません。ただ、スカラ座が最初のオペラの仕事だったら、僕はきつと続いてないでしょうね(笑)。

——そうやってオペラを経験して、自分の仕事人生で一番やりきったと思ったのが、1987年のベルリン・ドイツ・オペラの「ニーベルングの指環」4部作の日本初演です。トンネルをモチーフにした全長33メートルの「トンネル・リング」を演出に使う前代未聞の舞台で、成功すれば間違いない日本の音楽史に残る企画でした。舞台装置はもちろん、公演直前の会場変更などいろんなトラブルがあったのですが、なんとか初日を迎えたときは神様に感謝するほかなかったです。もう自分はこの仕事を一生続けていくのが使命だなと思いました。自分の人生を振り返れば、そうやって感動を蓄積していくことが、次の仕事に向かうエネルギーだったんだと思います。

——現在は昭和音楽大学で後進の指導にもあたられています。

広渡 学生の皆さんに言っているのは、とにかく多種多様な舞台を浴びるように観て、そこから自分自身のアイデンティティを見極めてほしいということです。感動を蓄積して、幅広い知識、時代感覚を養ってほしい。あと、英語は当然として、もう1カ国語

を学んでほしい。学生時代にしかできないことをやりなさいと言っています。

紀尾井は自分に縁のあるホール(佐藤)

クライバー生誕100年に書簡集出版を(広渡)

——佐藤さんは紀尾井ホールにどういう印象をお持ちですか。

佐藤 実は2019年のデビューリサイタルも、ミュンヘン国際音楽コンクールのあとの凱旋リサイタルという形で、紀尾井ホールで弾かせてもらいました。今回の受賞記念もそうですが、自分にすごく縁のあるホールだと感じています。

個人的にも何度も演奏を聴きに足を運んでいました。音の響きがとても豊かで、どの席に座っていても臨場感が感じられるホールですよ。

——最後に、お二人の今後の目標についてお聞かせください。

佐藤 僕は今、例えばクラシックの原点に立ち返って古楽器でバロックを勉強してみたり、独奏だけでなく四重奏を勉強してみたり、いろんなことに興味を持って取り組んでいます。とにかく勉強できるうちにどんどんして、何でも吸収しておきたい。20代の間は学びの場に自分自身をおいて、演奏家としての成長につなげたいと思っています。

広渡 僕は今年で82歳になるのですが、2つのことを目標にしています。1つは、2025年に博多駅前につくられるビルに音楽ホールができるのですが、そのロビーにこれまで僕がかかわった公演の資料や書簡、楽譜、舞台装置の設計図などを展示する部屋をつくるプランがあります。それを実現させたい。

もう1つが、亡くなったカルロス・クライバーの本を出すこと。彼はとても筆まめで、生前、山のようになに手紙をくれました。その書簡集を彼の生誕100年となる2030年に出版したいと思っています。